

# 知求会ニュース

2022年12月

第84号

## ◎ 博士号取得、おめでとうございます！

梁 鎮輝 (LIANG Zhenhui) (国際文化研究専攻・17期生)さんが、2022(令和3)年9月30日(水曜日)に宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻で、以下のように学位を取得されました。論文要旨は博士録61をご覧ください。

学位名：博士（国際学）

学位番号：国第35号

学位授与機関：宇都宮大学

学位授与日：2022年9月30日

論文名：幸田露伴研究：「圏外」としての近代中国という視座から

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2名・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)4名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1名・博士(人文学)(パリ東大学)1名・博士(芸術学)(筑波大学)1名・博士(社会学)(一橋大学)1名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)20名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)/(東京大学)/(一橋大学)4名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名・博士(医学)(自治医科大学)1名の計42名です。

## ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞(令和4年8月28日)2面に、「自主夜間中学開校1年 宇都宮校 小山校」と題して「学習者80人に倍増」および「二人三脚で支援今春8人高校へ」の内容でとちぎ自主夜間中学の記事が掲載されました。
2. 下野新聞(令和4年10月9日)25面に、「次世代に向けた戦争抑止訴え 宇都宮 戦場カメラマン講演」と題し記事の中で、坂本文子(国際学研究科国際社会研究専攻第5期修了生・社会共創センター特任助教)さんの記事が掲載されました。
3. 放送大学栃木学習センター「とちの実」第126号(令和4年10月号)2頁の巻頭言に「多様な学びを求めて：私の研究と教育」の題で佐々木一隆先生(国際学部教授)の原稿が掲載されました。

4. UU now 第 56 号 (令和 4 年 10 月 20 日) 12-13 頁に、『研究 keyword』コーナーで「声なき声と向き合う学際的なアプローチ—国際人道法・国際刑事法と平和構築—」の題で藤井広重先生(国際学部准教授)の記事が掲載されました。
5. 下野新聞 (令和 4 年 10 月 20 日) 4 面に、「宇大とスウェーデン・ルンド大」「脱炭素実現へ意見交換」および「学生ら 80 人、先進例紹介も」と題して、高橋若菜 (国際学部教授) 先生と高橋この葉(国際学部 3 年)さんの記事が掲載されました。
6. 毎日新聞 (令和 4 年 11 月 5 日) 19 面に、「自主夜間中学 本格始動 1 年」と題して「進学果たし夢育む」および「公立設置も目指しあるフォーラム」の内容で、とちぎ自主夜間中学の記事が掲載されました。
7. 下野新聞 (令和 4 年 11 月 13 日) 20 面に、「国際協力考える絵本」と題して、「アフリカの実話基に」および「宇大・阪本教授ら 現地寄贈も」の内容で、阪本公美子 (国際学部教授) 先生らの記事が掲載されました。
8. 下野新聞 (令和 4 年 12 月 3 日) 3 面に、「夜間中学を考えるオンライン研修会」と題して「きょう第 1 回開催」の内容で、とちぎに夜間中学をつくり育てる会 (田巻松雄代表) の記事が掲載されました。

#### ◎ 国際学部だより

1. 下野新聞 (令和 4 年 11 月 11 日) 22 面に、『けさの顔』コーナーで「イラストで最優秀賞に」と題して、杉浦奏さん(国際学部 2 年)さんの記事が掲載されました。
5. 下野新聞 (令和 4 年 11 月 21 日) 4 面に、「宇都宮でニュース検定」と題して「時事問題理解度 17 人が実力試す」の内容で、武田逸輝 (国際学部 4 年) さんの記事が掲載されました。

#### ○ 第 8 回重田ゼミ研究会開催報告

日時：2022 年 11 月 20 日 (日) 13：30～16：15

場所：Zoom によるオンライン発表会

報告会内容：

- ① 重田康博先生「近況報告と JANIC の THINK Lobby の活動について—タイの国際会議参加など—」
- ② 六川彩水 (2017 年 3 月卒業) 「マダガスカルでの生活と活動報告 協力隊員報告」
- ③ 阿久津実希 (2022 年 3 月卒業) 「国際学部のフェアトレードと SDGs 活動について—カケハシーズとろまんちっく村の事例から—」
- ④ 浅野琳香 (2022 年 3 月卒業予定) 「インドの若年層における生理用品と月経観—月経教育を受ける意義について—」
- ⑤ バトスヘ・ウヌビレグ (2021 年 3 月修了) 「モンゴルにおける NGO 等のアカウントビリティの現状と課題」

- ⑥ **ノピラ・ピッチャパー** (2022年3月修了)「社会参加仏教を担うタイと日本の仏教団体—日本の立正佼成会とスワンケオ寺の事例から—」
- ⑦ **羅桐** (2022年3月修了)「災害伝承における NPO の役割と課題—3.11 みらいサポート石巻を事例として」

上記の日程で「第8回重田ゼミ研究会」が Zoom によるオンライン発表会が開催されました。ゼミ生ら 19 名が国内外から参加され、活発に意見交換されました。

**研究室訪問 56** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

**博士録 60** 第22号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

**「世界経済システムと ODA:  
ガーナの南北格差と TICAD 以降の日本の対ガーナ開発支援」**  
アクア スータニスラウス

### 1. 博士論文要旨

ガーナはその歴史を通じて、社会主義や自由主義といった特定の経済イデオロギーに従ってきたが、現在もなお多くの開発課題に直面している。ガーナの開発課題の1つは、ガーナの北部と南部の間の空間的不平等であり、北部と比較して南部は相対的に発展している。南北の空間的不平等は、ガーナが一次産品の輸出国としてどのように世界経済に統合されたかに関連しており、SAP (Structural Adjustment Program) の時期がそのさらなる証拠となる。このことが、ガーナを援助依存の国にしている。

ガーナの主要な開発パートナーのひとつは日本であり、ガーナが HIPC (Highly Indebted Poor Country) に参加する以前は、ガーナの最大の援助国であった。2008年、日本のアフリカ諸国への開発援助の枠組みである TICAD (Tokyo International Conference on African Development) は、人的支援から貿易・投資促進による経済成長へと焦点を移し始めた。これは、ガーナが新たに低中所得国になったのとほぼ同じ時期である。ガーナの低中所得国化は ODA の削減を意味し、そのため開発のための経済成長の促進が必要とされた。TICAD の新しいアプローチは、アフリカ諸国における東アジアの開発モデルを反映していると言われている。しかし、政治、経済、教育の面で、東アジアの「奇跡」を生んだ東アジアの開発モデルの重要な構成要素のいくつかに欠けているのである。したがって、特に南北の空間的不平等に関して、援助が受益国内の不平等にどのような影響を与えるかという点で、日本の援助はどのような意味を持つのだろうか。

1999年から2020年までのガーナにおける日本の援助プロジェクトの空間的配分を見ると、相対的に貧しい北部ガーナよりも南部に多く援助プロジェクトが配分されていることが分かる。しかし、人口あたりのプロジェクト数比率は、経済開発プロジェクトを除いては、むしろ北部に有利であり、特に2010年から2020年にかけては南部に有利な比率となっている。また、人間開発援助プロジェクトは全般的に減少しているが、教育プロジェクトや北部のプロジェクトに多く見られる。インタビューを通じて、グローバルな経済システムが、日本の援助プロジェクト、特に経済開発プロジェクトを、北よりも南に集中させる要因であることが明らかになった。なぜなら、南部での経済成長により、北部から南部への移住が進み、恩恵を受ける人が少ないのにGGHSP (Grant Assistance for Grassroots Human Security Projects) のような援助事業を配分するのは不合理であり、さらにGGHSPを申請することができるようになるからである。日本の対ガーナ援助を含め、ガーナの開発は、経済成長を重視し、人間開発から手を引く新自由主義的な世界経済システムの影響を受けており、あまり現実的ではなかったように思われるかもしれない。このことは、TICADがガーナの状況で経済開発プロジェクトを重視することは空間的不平等を深め、教育援助プロジェクトを削減することは主に北部と南部の間の不平等を拡大させることにつながるという観点からである。本研究は、日本政府、ガーナのステークホルダー、そして他のドナーに対して、人間開発、特に教育を優先させることなく経済開発を重視する援助は不平等を拡大させるという認識を喚起するものである。

## 2. 助言

宇都宮大学での学びはとても良い機会であり、とても楽しかったです。私は学生の皆さんに、学習の過程にもっと集中し、楽しむことをお勧めします。そうすれば、不安やストレスが取り除かれるでしょう。学習や研究は最も大切な事柄であり、心配事ではなく楽しいものであるべきです。また負担ではなく、解放的で充実したものであるべきです。学習や研究を通して、私たちはどんな夢を持っていても、何か大きなことを成し遂げ、社会に貢献することができると思います。

(国際学研究科 博士課程 国際学研究専攻 第13期修了生)

(2022年10月17日原稿受理)

**博士録61** 第22号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

### 「知を求める凡人の道」

梁 鎮輝

#### 1. 博士論文要旨

本研究は、基本的に露伴の作品群を整理、分析する形で進める。なお、序章と終章を除いて、全五章からなる。

まず、序章では、先行研究を踏まえながら本研究の目的と課題を示し、なぜ幸田露伴(1867-1947)、そして近代中国を取り上げるのかについて整理した。

第一章では、少年時代に培われた露伴の漢学素養と近代中国書籍の受容について確認し、露伴が思惟の「中国」へどのようなまなざしを向けていたのかを分析した。露伴は決して漢学へ一方的に傾倒するのではなく、自分自身の文体を創造する際には批判的に国語と漢文の融合を図るべきだという。また、露伴は単に日本と中国の文化的な緊密性を説いていただけではなく、その「中国」(主に古典世界)を解釈する意義は自国や世界への理解に繋がるという認識を持っていたことも確認できた。

第二章では、前章にみられる露伴の「中国」理解が植民地的発想に変形しないことを確認すべく、戦争に対する露伴の言動を把握し、現実の「中国」へ露伴はどのようなまなざしを向けていたのかを確認した。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦に対して、露伴はある程度非戦言論を展開していた。そして、日中戦争期は一見「沈黙」、「従順」を選んだように見えても、釣りや趣味などの言説空間を通して時局への批判を込めていたことが分かった。

このように第一章と第二章では、近代日本の中国認識について通史の記述である古典中国への尊崇と近代中国への侮蔑の二つの感情では語りきれない露伴の持つ思惟・現実の「中国」観を把握した。

これらを踏まえ、第三章、第四章、第五章では、国民感情の主流を占める近代中国への蔑視という状況下で、露伴は如何に近代中国に学んだのかといった点について、具体的な検討をそれぞれ水滸伝論、墨子論、道教論といった観点から行った。露伴が文学、政治、宗教の諸分野に関して近代的思惟を展開する際、その模倣、批判、解釈の材料となるのは、胡適(1891-1962)、梁啓超(1873-1929)、張元濟(1867-1959)、丁福保(1874-1952)などの知識人が古典世界の中から近代化に寄与する形で再解釈・再提唱した水滸伝、墨子、道教であった。

本研究では、露伴が注視する対象が、常に思潮の主流とは異なる性質を持つものであることも露伴の思惟の特徴の一つであることを呈示した。それは例えば、「水滸伝」を論じつつも、文学の精華は小説ではなく詩詞文章にあることの強調や、孔子に対して反逆的な思考を持つ墨子への注目、迷信と論じられがちな道教への再評価などから窺える。更に言うところ、エキゾチックの対象でもなく、戦争によって触発されたものでもなく、「学」の構築において決して主流として認識されない近代中国を持ち出すこと自体、その表れの一つである。この思考方法は、露伴自身が使用した「圏外」という言葉に集約されており、近代における露伴という存在の特異性は、「圏外」としての近代中国から様々な養分を得ていたことに由来すると論じた。

そして最後に終章ではこの「圏外」という露伴の思考方法について触れつつ、本論文の結論を示し、今後の研究課題について論じた。

## 2. 助言

国際学研究科には、様々な領域で研究の道を目指す同志がいます。この環境こそ、国際学研究科の最大な利点であり、ぜひ大切に活用してください。皆さんに助言できるほどの才覚を持ち合わせていませんが、「努力して努力する」より「努力を忘れて努力する」（幸田露伴『努力論』）ことこそが学問を修める者にとって最も重要な心掛けであると考えます。そのような境地を目指して共に頑張りましょう！

（国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第11期修了生）

（2022年10月13日原稿受理）

**知究人 37** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

**海外だより 31** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

### 「「違い」よりも「共通点」を見る」

田中 えり

「社会人になっても留学に行きたい気持ちがあったら、その時に行こう」

宇都宮大学国際学部の学生だった10年ほど前、私はこう考えていた。周囲の友人の多くが留学していく中、私はさまざまな理由から、留学という選択肢を選ばなかった。その後大学を卒業し、就職して8年が経ち、今、アメリカの西海岸、サンフランシスコという都市にきている。会社に相談し、1年間の休職をもらって実現できた留学だ。

「どうして社会人の今のタイミングで留学に？」と聞かれると、「今、行きたいと思ったから」というシンプルな答えが一番しっくりくる。

就職した新聞社で記者として慌ただしくも充実した毎日を送っていたが、いつも走ってばかりいたせいか周りの景色が見えなくなり、自分の視野が狭くなっていく感覚があった。

一度休息をとって、新しい空気を吸いたい。コンフォートゾーンから飛び出して、成長したい。そう思った時に、宇大生時代にやり残したこと、留学に行こうと思ったのだ。

移民大国と呼ばれるアメリカを象徴するように、サンフランシスコにはさまざまな人種の人々が集まっている。2020年国勢調査によると、サンフランシスコの人口比率は約40%が白人、次いでアジア系約35%、ヒスパニック系約15%、アフリカ系約5%など。

街を歩けば、さまざまなアクセントの英語を耳にするし、スペイン語、中国語など他の言語も日常的に聞こえてくる。まさに多文化の街と言える。

私が通っている語学学校では、コロンビア、ブラジル、韓国、台湾、フランスなど世界各地から集まった人々と交流する機会に恵まれている。共に英語を学び、お互いの言語や文化を紹介し合っている。お互いの中にある違いを理解し、尊重し、共通点を見つけては喜ぶ。「違い」にとらわれるのではなく「共通点」を見ること。人と人とがより良い関係を築く上でそれがいかに大切な姿勢か、ここに来て気付かされた。

今年5月、サンフランシスコに来たばかりの頃、通学途中に、道で知らない人から **Good Morning** と挨拶されて、嬉しい気持ちになった。ここでは、道で会った人に気軽に挨拶をしたり、目を合わせて頷いたりする。すれ違った相手の洋服が素敵だなと思ったら「あなたのそのジャケットいいね！好きよ！」と話し掛けたりもする。私はその習慣が好きだ。自分がこの社会で何かの一部に属していると感じることができるからだ。「自分は一人ではない」「ここにいていい存在なのだ」と思える。

留学期間は残り1ヶ月ほどとなり、終わりが見えてきた。まだまだ吸収したいことはたくさんある。残りの期間も自らの好奇心に身を任せ、学びを深めていきたい。

(国際学部国際社会学科 第16期卒業生)

(2022年11月29日原稿受理)

**海外留学今昔 32** 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者** および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**学生サロン 20** 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**キャリア指南 15** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**フォーラム** 2022年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 寄稿者の都合により、掲載を延期します。

### **東南アジア支部だより**

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から**年2回発行(4月1日、9月1日)**の変更になりました。



## EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 44 号の内容は、1. イタリア メローニ内閣が始動、女性・民間閣僚は減少 2. EU 支部だより ―世界で働く女性首相―です。

### 編集者のひとりごと

●編集時点では、サッカーワールドカップの準決勝・決勝を控えています。侍ジャパンの活躍で大いに盛り上がりました。結果は残念でしたが閉塞感漂う中、前向きに挑戦することを想起させました。寝不足になった同窓生も多かったことでしょう。さて、準決勝は日本に PK で勝利したクロアチア対アルゼンチンとフランス対モロッコです。

●20 代前半の若い時分に、モロッコを旅行したことがあります。古都フェズを訪問しました。初めてのアフリカ訪問でした。映画の「カサブランカ」がモロッコを広く世界に知らしめました。訪問したフェズの町並みは迷路のようでした。

●20 代半ばには、仕事で中東のサウジアラビアで 10 カ月過ごしました。淡水化プラントの仮設工事でした。サウジアラビアはメッカ、メディナを擁するイスラム教スンニ派の国で、戒律が厳しいところです。滞在中はアルコールの飲酒は厳禁でした。過酷な環境での工事でした。その際に、初めて 1 日 5 回の礼拝をするイスラム教徒の宗教心に触れました。

●遡ること、異文化体験は大学生の時でした。早稲田大学吉阪研究室主催のインド・チャンディガール研修でした。ル・コルビュジエに師事した吉阪隆正先生と弟子の渡辺洋治先生が引率でした。1 週間のハードなスケジュールでした。この旅行の異文化体験は強烈でした。確か、インド楽器のミニ・シタールを大事に抱えて帰国したことが昨日のようです。

●スリナガルでのポートハウスでの思い出も忘れることができません。オーナーの身内の結婚式だったかに呼ばれて、差し出されたマトンの皿に手が出せなかったことがありました。匂いが受け付けず、喉を通らなかったのです。今、思うと大変失礼なふるまいだったなど悔いが残っています。

さて、知求会ニュースも、無事 21 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

---

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 [chikyukai@freeml.com](mailto:chikyukai@freeml.com)